

公開シンポジウム(PL2)

英語学習入門期における音声教育について

西尾 由里 (名城大学)
ynishio@meijo-u.ac.jp

1. はじめに

新学習指導要領が 2020 年から施行され、小学 5・6 年生からは年間 70 時間当てられ教科となり、聞くこと、話すことに加え、読むこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す。さらに、小学 3・4 年生から年間 35 時間の英語活動が導入され、従来よりも早期に英語学習が開始されることになる。小学 3・4 年生の英語活動の目標は、外国語による聞くこと、話すことの外国語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成するという。具体的には、日本語と外国語との音声の違いに気付くとともに、その音声に慣れ親しみ、コミュニケーションを図ろうとする態度を養うということで、音声教育が非常に重要な位置を占めている。本発表では、小学 3・4 年生の英語学習入門期における音声教育について、第二言語習得論の知見を基に、どのような音声教育を目指すべきかを述べる。

2. 音声習得と年齢

英語学習開始年齢が小学 5 年生 (10・11 歳) から、3 年生 (8・9 歳) に引き下げられることは、音声習得において有利に作用するのか。その考えの発端として臨界期仮説 (Lenneberg, 1967) がある。それは、言語の発達には脳の一侧化が 12 歳で終わるため、それ以前に英語学習を開始する必要があるという仮説であるが、第二言語でもその仮説があてはまるのか、様々な研究が行われた。英語が第二言語環境である移民の子供の場合、6 歳までに米国滞在した場合、ほぼ母語話者の発音になり (Oyama, 1976)、帰国子女のデータでは、6 歳までに渡米した子供は、母語話者の発音を身に付け、7・8 歳の子供も、ほぼ母語話者のような発音を身に付ける (Uematsu, 1997) という。また、西尾 (2000) によると、小学校で週 1 回英語学習を受ける子供の音素の発音を調べた結果、小 1～3 年 (7 歳～9 歳) の間で英語を学習した子供が他の開始年齢の群 (6 歳以前群、10 歳～12 歳群) より、母語話者の発音により近いという結果であった。また、Nation & Newton (2009) では、開始年齢と発音の関係は明らかである (‘there is clear evidence,’ p. 78) といい、6 歳以前であれば、母語の影響を受けない発音を身に付け、7 歳～11 歳であれば、多少母語の影響を受ける発音となり、12 歳以降であれば、母語の影響を受けるという。これら先行研究では、条件や対象者が異なっているため、どの開始年齢が発音に影響するかとの限定はできないが、12 歳以前の若年であるほうが発音に有利であろう。特に、新学習指導要領

により、3年生(8・9歳)からの英語学習開始となれば、EFL(English as a Foreign Language)の環境であっても、外国語の音声習得しやすい年齢であると推測される。

3. 音声習得と頻度効果

母語であれ、第二言語であれ、多くの研究者がインプットの頻度(頻度効果: Frequency Effects)が言語習得に大きく影響していると述べている(Ellis, 2002)。英語母語話者の乳児は、6ヶ月前までに、韻律情報を利用して、言語間のリズムの違いがわかるようになり、6ヶ月になると母語の典型的な音素対立がわかり、母語の音声体系を構築するようになり、8ヶ月の乳児は、出現頻度の多い音連続を知覚し、音節の境界を判別できるようになる。また、日本語母語話者も、4ヶ月から6ヶ月の乳児は/l・r/を聞き分けられるが、10ヶ月以降は母語音声体系には区別が必要ないため/l・r/の弁別が困難になる。また、8ヶ月の乳児は養育環境の方言を選好して聞くようになる(母語のインプットの効果は西尾(2011)を参照)。第二言語においても、形態素、語彙、音節など頻度効果を立証している研究は多い(Kartal & Sarigul, 2017)。

小学校の英語活動では、教員の発話、児童同士の発話とともに、文部科学省が作成した『Let's Try!1・2』のデジタル教材からの音声などインプットの頻度が重要であると考えられる。

4. 音声指導

4.1 タスク中心の音声指導

入門期の発音指導は、コミュニケーションの素地を作るという意味でも、重要性は大きい。

Nation & Newton (2009) が、発音指導の方法として次のタスクやアクティビティを紹介している。「音の繰り返し」(Repeating sounds) はモデル音声を聴き、学習者が同じように繰り返すことである。授業中の発音練習として “Repeat after me” と教員が言い、児童が何度となくその音をまねてリピートすることがある。Nation and Newton (2009) が Locke (1970) の研究を引用して説明しているが、学習者がモデル音を2回繰り返しても、ほとんど音声の向上が見られない。すなわち、モデル音のリピートは最初の非常に短い時間だけのみ効果があるということであり、何度も繰り返すことでは、発音は上達しないといえる。

母音の発音において、教員が舌や口内の部分をゆっくり移動させて、どのような発音になるか何回か真似をさせる方法 (slurring and bracketing) がある。例えば、舌を前方上に上げ /ɪ/ を発音し、舌を下げ /æ/ を発音し、またその中間ぐらいに舌を置き /e/ と発音するということである。

さらに、舌や口の動きがわかるような、発音図解(diagrams for pronunciation)も効果的である。また、学習者が2つのよく似た音 fa, baなどを発音し、教員がどの発音をしているか当てさせる testing the teacher のタスクもある。

Nation & Newton (2009) は、さらに、発音を向上させるためには、聞き取る

能力を向上させることが大切であるとし、つぎのような練習方法を提示している。2つのよく似た音、pa-baなどの違いの聞き取り(distinguishing sounds), 2つの音のどちらかを教員が発音し、どちらの音であるか同定する(identifying sounds), また、絵を使って、sheep-shipのどちらの絵の発音をしているか聞き分けるというアクティビティも効果的であるという。

Nation & Newton (2009) のアクティビティは、どれも小学校での応用が可能である。特に実際の発音の指導には、まず、教員が、発音図解(diagrams for pronunciation)で、舌や口の動きをイメージする。それから、slurring and bracketingの方法を使い、日本語と英語で異なる音の違いを教員が舌や口内の部分をゆっくり移動させて、どのような発音になるか何回か真似をさせる方法が効果的であると考えられる。例えば、まず日本語の /i/ を発音し、そこから、舌を上を引き上げて、口を横一杯に広げ、「イーだ」をするように /i:/ を発音し、それから、唇を脱力して、舌を少し下げ、/ɪ/ と発音するというように説明を加える。このように日本語と英語の音の違いを利用して、英語の音を指導するのは、新学習指導要領の外国語の目的である、「日本語と英語の違いに気付く」という点でも合致する。

4.2. 文字を使った音声指導

音声インプットのみでは、英語の音素体系を正確に認識できていない可能性があることを指摘し、音声指導において、西尾(2015)は文字を利用した方法を紹介している。そもそも、英語の音素体系と日本語の音素体系は大きく異なっている。たとえば、日本語においては、/l/・/r/の区別は存在しないため、英語のriceとliceは日本語の「ラ」行子音で聞いてしまう。したがって、音素のカテゴリー化が必要である。

また単語内の位置の違いにより、異音が生じる。例えば、/l/の音を例にとると、leaf, feel, playの/l/は音素としては同じであるが、発音記号で表せば、leafの/l/は母音の前にあるので明瞭な[l]となり、feelは語末であるためダーク[l̩], playは無声音の/p/の後に続くため、無声化が起こる。このように、同じ/l/の音声でも、単語内の位置や前後の音によって、音声は異なっている(Collins & Mees, 2007)。

さらに、英語の場合、センテンスになると、例えば、What time is it? 「ほったいもいじるな」、What do you say? 「わだっやせい」と聞こえる。このように、単語のみの発音の場合とは、大きく発音自体が異なり、聞こえが異なってしまう。このような音の変化には、消失(elision), 弱化(reduction), 短縮(contraction), 連結(linking または liaison), 脱落(deletion), 同化(assimilation)の6種類がある。例えば、I am がI'm [aɪm] となり、Stand up は[stænd] [ʌp] ではなく[stændʌp], Good day が[gʊ(d)deɪ] となる(詳しくは山田・足立・ATR 人間情報通信研究所, 1999, 参照)。

音声のインプットのみを受け、カテゴリー化が十分に行われていない状態は、

図 1（西尾，2015）に示される．音声インプットだけでは，図 1 のように，すべての音声は単語や単語の組み合わせ，あるいはセンテンスごとに異なった音として知覚されることになり，すべて別の音声として覚えることになる．あるいは，/l/ や /r/ の場合，日本語の /r/ の過剰般化が起こり，すべての /l/ や /r/ を，ひとつの音素 /r/ に置き換えるという単純化が起こる．すなわち，単語や単語の組み合わせやセンテンスに出てくる少し違って聞こえる音であっても，1 つの同じ音であるという認識，すなわち音素カテゴリーを促す学習が必要である．具体的には，a は /æ/ という音を持っているというように，文字を一つの記号と考え文字と音を一致させる学習法であるフォニックスを教えることは音素のカテゴリー化を促進するといえる．



図 1：音声知覚イメージ

[出典：西尾 (2015), p. 46]

5. まとめ

新学習指導要領が開始され，英語活動がスタートする小学 3・4 年生は，8・9 歳であり，EFL の環境であっても，外国語の音声を習得しやすい年齢であるといえる．そのような入門期に正しい英語発音の仕方を教え，タスクやフォニックスを使い，音素のカテゴリーを構築させるような指導をすることは非常に重要である．

参考文献

- Collins, B., & Mees, I. M. (2009) *Practical phonetics and phonology, Second edition*. London: Routledge.
- Ellis, N. C. (2002) “Frequency effects in language processing, A review with implications for theories of implicit and explicit language acquisition”, *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 143–188.
- Kartal1, G., & Sarigul1, E. (2017) “Frequency effects in second language acquisition: An annotated survey”, *Journal of Education and Training Studies*, 5, (6), 1-8.
- Lenneberg, E. (1967) *Biological foundations of language*. New York: John Wiley & Sons.
- Locke, J. L. (1970) “The value of repetition in articulation learning”, *IRAL* 8, (2), 147-154.
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領平成 29 年告示』
- 文部科学省 (2018) 『Let's Try! 1・2』 附属デジタル教材
- Nation, I. S. P., & Newton, J. (2009) *Teaching ESL/EFL listening and speaking*. NW: Routledge.
- 西尾由里 (2000) 「年齢要因および学習経験が音素の発音に及ぼす影響についてー公立小学校を対象としてー」『児童英語教育学会紀要』 19, 1-15.
- 西尾由里 (2011) 『児童の英語音声知覚メカニズム L2 学習過程において』 東京: ひつじ書房
- 西尾由里 (2015) 「第 4 章 音声習得のための文字学習のすすめ」高橋美由紀・柳善和 (編)『小学校英語教育授業づくりのポイント』 pp. 42-52. 東京: ジアース教育新社
- Oyama, S. (1976) “A sensitive period for the acquisition of a nonnative phonological system”, *Journal of Psycholinguistic Research*, 5, 261-283.
- Uematsu, S. (1997) “The effects of age of arrival on the ultimate attainment of English as a second language”, *JACET Bulletin*, 30, 161-175.
- 山田恒夫・足立隆弘・ATR 人間情報通信研究所 (1999) 『英語スピーキング科学の上達法』 東京: 講談社